

話法の境界上の言葉

—— 疑似直接話法について ——

新 井 美智代

本論では、まず疑似直接話法 (несобственно-прямая речь) が、他の二つの話法、すなわち直接話法 (прямая речь) 及び間接話法 (косвенная речь) と同じレベルにある話法として分類できるのかについて考察し、次に話法の境界に関する問題提起を行う。

1. 用語の問題：疑似直接話法と半直接話法¹

形式的な定義が周知のものとなっている直接話法や間接話法とは異なり、疑似直接話法と半直接話法については原則的な形式上の定義を確認しておく必要がある。《Русский язык. Энциклопедия》では疑似直接話法は次のように定義されている。

疑似直接話法は間接話法と同様に作者の言葉に属し、全ての代名詞と動詞の人称形は作者の視点からのものとなるが、同時に疑似直接話法には、直接話法の言葉の明らかな語彙的・統語的及び文体的特徴が見られる。疑似直接話法は、発言の動詞に導かれる従属節ではなく、独立した文の形をとる (Русский язык. Энциклопедия 267)。

クリュチコフとマキシモフは疑似直接話法を次のように説明している。

他者の言葉は、(直接話法や間接話法におけるのと異なり) 他者の言葉が発されたという事実やその話し手を指示する言葉によっても、また(直接話法や叙述に直接組み込まれた他者の言葉と異なり) 代名詞の交替によっても、(間接話法におけるのと異なり) 従属節を示す特別な形式によっても作者の言葉との境界を示されず、それと溶け合う。〈…〉疑似直接話法は独自の統語的形式を持たない。代名詞の使い方はそれを間接話法に近づけ、他者の言葉の特徴を比較的自由に伝える点においては直接話法に近い (Крючков, Максимов 173)。

チェコスロバキア・アカデミーの『ロシア語文法』は、この話法に「半直接話法 полупрямая речь」という用語を用い、

半直接話法は直接話法と間接話法両方の意味論的及び形態的特徴を併せ持つ。直接話法と同様に導入文の有無は任意

的だが、直接話法とは異なり、一貫した作者のテキストと分離はしていない。〈…〉間接話法の最も典型的な特徴の中で半直接話法が保持しているのは人称のカテゴリーの交替だが、しかしながら人称形と代名詞が三人称に限られている点において、間接話法とは異なっている (Русская грамматика: 2, 995)。

としているが、一般にロシア語文法では「半直接話法」は、「動詞と代名詞の人称形が直接話法の規範に従って用いられ、統語的には間接話法と同様に従属節の形をとる」ものを指す (Русский язык. Энциклопедия 267)。²

このようにロシア語には直接話法と間接話法の特徴を言わば表裏の形で併せ持つ二つの話法が認められている。すなわち独立した文の形をとりながら、伝達者(語り手)の視点から人称形が決定される疑似直接話法と、従属節の形をとりながら、想定される原発言の人称形を保つ半直接話法である。従ってロシア語における四つの話法の典型例は次のようになる。

直接話法：Он сказал: «Мне холодно».

間接話法：Он сказал, что ему холодно.

疑似直接話法：Ему холодно.³

半直接話法：Он сказал, что мне холодно.

ただし半直接話法は《дескать》《мол》など他者の発言の引用であることを示す助詞を用いない限り文法的には誤りとされている。一方疑似直接話法はロシア文学において登場人物の発言や思考を示す手法として広く用いられており、以下この話法を中心に議論を進める。

2. 疑似直接話法の位置

上述の定義は、疑似直接話法を「直接話法と間接話法の間にある話法」と見做していると考えられる。また疑似直接話法に相当する英語の自由間接話法 (free indirect speech) に関して言えば、G. リーチと M. ショートは言葉の伝達の諸形式を一直線上に並べ、自由間接話法を直接話法と間接話法の間に置いた

(Leech, Short 324)。さらに M. スタンバーグは「直接話法の形式的特徴は、伝達される言葉が統語的にもダイクシスに関しても枠組みから独立していることである。自由間接話法の形式的特徴は、統語的には独立しているが、ダイクシスに関しては（少なくとも代名詞に関しては）従属していることである。間接話法の形式的特徴は、統語的にもダイクシスに関しても従属していることである」という簡潔かつ明瞭な形式的な定義を提示している（Sternberg 68）。⁴

しかしこれらの定義や説明には見落とされている重要な点がある。それは「統語的には独立しているが、ダイクシスに関しては（少なくとも代名詞に関しては）従属している」文というのは、伝達者の言葉、文学作品であれば語り手による叙述にもそのまま当てはまるということだ。この点に関しては H. コフトゥノーフが興味深い議論を展開している。

ある定義によれば、疑似直接話法は直接話法と間接話法の中間に位置し、直接話法と間接話法の「境界上に」ある現象だと言うことになる。だがそのような定義は不完全だという欠点がある。第一に、そのような定義が十分な根拠をもって関係付けられるのはある種の疑似直接話法に限られ、第二に、その種の疑似直接話法の範囲内においてさえ、それは形式的な特徴だけに基づいているからである（Ковтунова 18）。疑似直接話法は、「直接話法と間接話法の境界」ではなく直接話法と作者の言葉の境界上にある（Там же. 20）。

疑似直接話法による言葉は、それが誰の言葉であるかについて、例えば挿入句などの形で示されていない限り、形の上からはそのまま語り手の直接話法という言葉、すなわち叙述の言葉と変わらないことが多い。従って、所与の言葉が語り手自身のものではなく、登場人物の言葉であると確認されて初めてそれは直接話法と間接話法の間に存在すると言えるのである。それに対し直接話法と間接話法は文脈に関係なく、かなりの程度において形式的に判断できる。この意味で疑似直接話法は直接話法及び間接話法と同じレベルで分類することはできない。⁵

では文学作品の叙述に組み込まれた言葉が、純粹に語り手のものではなく、疑似直接話法によるものであることを確かめるには、何を指標にすれば良いのだろうか。コフトゥノーフは次の項目を挙げている。⁶

- ①時制
- ②会話体的特徴と情緒的表現（間投詞；感嘆，疑問，強意，指示等を示す小詞）
- ③出来事への疑いや確信の表現

- ④言葉が登場人物に帰属することを示す叙述の言葉
- ⑤登場人物がしばしば用いる表現
- ⑥意味内容から登場人物のものと考えられる言葉
- ⑦反復や倒置

まず①についてだが、疑似直接話法は原則として相対的な時制を用いるので、過去形でなされる叙述に引用符なしの現在形や未来形が表れるとき、それは疑似直接話法と見做すための指標になる。ただしコフトゥノーフも指摘しているように、疑似直接話法でなくても、出来事をあたかも今、目の前で起きているかのような印象を与えるため、叙述が現在形で為されることもある。またそもそも叙述が現在形で為される作品では指標とならないし、⁷ 原発言に過去形が用いられていれば、疑似直接話法でもそれは保たれる。つまり時制は指標とはなり得ても絶対的ではなく、それが疑似直接話法か語り手による叙述かを判断するには内容や文脈に依拠せざるを得ない。②の会話体的表現も、語り手がそのような表現を使わないことが前提条件となる。③は④に含められようが、いずれにせよ文脈なしには判断できない。⑤も作品全体に表れる登場人物の直接話法のことを参照する必要がある。⑦も②と同様そのような表現を語り手が用いず、かつ内容からそれが登場人物のものであることを確かめねばならない。唯一④が存在するとき、ある表現を疑似直接話法と客観的に判断する根拠となる。

このように疑似直接話法は、その内容あるいはそれが使われた文脈を参照せずには同定できないものであり、その点で直接話法と間接話法とは質的に異なっている。それは直接話法と間接話法の境界上にあるとともに、登場人物の直接話法という言葉と、語り手の直接話法という言葉の境界上にもある、つまり二つの境界に関わる話法なのである。

3. 話法の境界

要するに、ある表現が直接話法の独立性と間接話法における人称の従属性の特徴を併せ持ち、しかもそれが伝達された言葉であるとすれば、それは疑似直接話法であると見做されることになる。ではこのように確認された直接話法、疑似直接話法、間接話法というカテゴリーは明確な境界線で区切られているのだろうか。言い換えれば、間接話法の中に直接話法や疑似直接話法に特徴的な要素が入り込むことは無いのだろうか。

このことについては、話法といわゆる声との問題を絡めて、規範的な直接話法と間接話法とを厳密に区別

する見方が存在する。例えばパードウチェヴァは次のように述べている。

間接話法の文とは、ひとまとまりの言説であり、話し手は、自己基準的な要素全ての所有者である。直接話法の文には二つのテキスト、二つの言説が有り、それぞれがその話し手と受信者を持つ。導入文の主語は、その話し手が自身の領域で担うのと同様に、自らの領域においては自己の役割を担う。この話し手の領域は導入文に限定されている。[伝達される] テキストの自己基準的な要素を支配するのはもはや導入文の話し手ではなく、その主語である(Падучева 338)。

このように情緒的表現の担い手やダイクシスの基準点を、その文全体の発言者に限定すれば、間接話法において、想定される原発言の情緒的要素は排除され、ダイクティックな表現は話し手を基準とするものに置き換えられることになる。

これに関してはヴォロシノフも同じ見解を持っていると思われる記述があり、スタンバーグやマックヘイルから疑問を投げ掛けられることとなった(Sternberg 75-76; McHale 261-63)。問題となるのは、『マルクス主義と言語哲学』の第三部第三章における、A.M. ペシュコフスキーの間接話法に関する主張への批判である。

もしペシュコフスキーが、文法的規則のみを遵守しながら直接話法を間接話法にそのまま置き換えるという同じような実験をフランス語で行ったとしても、結果は同じだったろう。〈…〉直接話法と疑似直接話法に適した一連の語、表現、言い回しは、間接話法の中に移されたとき奇妙に響くものなのだ(Волошинов 124)。

ペシュコフスキーの独自の実験は、彼が間接話法の言語上の意味そのものを完全に無視していたことを証明する。その意味とは、他者の言葉の分析的伝達である(Там же. 125)。

言うまでもなく、話し手の意向を構文や構文による強調で表現したものは、直接話法からそのままの形で間接話法に移すことはできない。例えば、疑問文、感嘆文、命令文などの構文上の特性や強調上の特性は、間接話法の中では保たれず、その内容面のみに示される(Там же. 126)。

しかしマックヘイルも指摘しているように、ヴォロシノフはこの主張の直後、それに矛盾する間接話法のヴァリエーション、つまり「言語分析的ヴァリエーション」を示している。これは「他者の発話の主観的・文体的性格を特徴づけている語や言い回しも、表現として間接話法の中に導き入れる」というものであり、ドストエフスキーの『白痴』から、次のような例が挙げられている(Там же. 129)。

Он нашел ее (т. е. Настасью Филипповну) в состоянии, похожем на совершенное помешательство; она вскрикивала, дрожала, кричала, что Рогожин спрятан в саду, у них же в доме, что она сейчас видела, что он ее убьет ночью... зарежет!

これは間接話法でありながら、言葉の間を示す多重点や感嘆符など、通常、直接話法や疑似直接話法に見られる表記を用いている。つまりヴォロシノフは疑似直接話法に近い間接話法、あるいはその両者の境界上にある表現を認めていた。実はヴォロシノフによるペシュコフスキーの批判は、直接話法的な要素を含む間接話法を彼が作り出したことそれ自体よりも、その結果得られた表現の奇妙さゆえに、「間接話法はロシア語に本来的なものではない」とした結論に対するものだった。ヴォロシノフはロシア語において間接話法と他の話法の境界が曖昧であることを認めつつも、それでもなおロシア語にはそれ固有の間接話法があり、その本質は「分析的傾向」であると主張したのである。

間接話法に直接話法的あるいは疑似直接話法的要素が入り込み得るということについては、Н. Кожеевニコフも「絵画的間接話法」という用語を用いて多くの例を挙げている(Кожеев 118-20)。

・敬語としての三人称複数形が保たれているもの

Седой Тихон, в парике, высунувшись из двери официантской, шепотом доложил, что князь *почивают*, и торопливо затворил дверь («Война и мир»).

・丁重さを表す《-с》が残っているもの

Марфа Игнатьевна сообщила ему на его вопрос, что Иван Федорович уже два часа, как *вышел-с* («Братья Карамазовы»).

・発音やイントネーションを保っているもの

Аратов <...> сказал, что придет *непременно... непременно!*.. — и ушел(И. С. Тургенев. «Крала Милич»).

これらは言わば間接話法と疑似直接話法の境界上にある表現で、文学作品にはこのような例は多い。

① Она села играть в карты с нею и Геденовском, а Марфа Тимофеевна увела Лизу к себе наверх, сказав, что *на ней лица нету, должно быть, болит голова* («Дворянское гнездо». Тургенев: 7, 260).

② ...он не понимал, *что заставил ее, Варю, отдаться этому французу, и как могла она, зная себя неверной, быть по-прежнему спокойной, по-прежнему ласковой и*

доверчивой с ним! (Там же. 176).

③ Положив руку к козырьку, он наклонился пред ней и спросил, *не нужно ли ей что-нибудь, не может ли он служить ей?* («Анна Каренина». Толстой: 8, 116).

次の例は疑似直接話法に導入文が挿入されているものだが、伝達される言葉が疑問詞で始まっているので、下線部を取り去れば、《зачем》以下は《спрашивал он всегда》を主節とする従属節に疑問符が残ったものと見做せる。つまりこれは疑似直接話法ではあるが間接話法寄りの位置にあると言えよう。

④ Но зачем же, спрашивал он всегда, зачем же такая важная, такая решительная для него и в то же время такая в высшей степени случайная встреча на Сенной (по которой даже и идти ему незачем) подошла как раз теперь к такому часу, к такой минуте в его жизни, именно к такому настроению его духа и к таким именно обстоятельствам, при которых только и могла она, эта встреча, произвести самое решительное и самое окончательное действие на всю судьбу его? («Преступление и наказание». Достоевский: 6, 50).

次に直接話法に近い疑似直接話法の例を挙げよう。次の例の斜体字の部分は直接話法のように引用符で括られているが、話し手が三人称で示されている。引用符は所与の言葉を叙述から切り離すという意味で、書かれた言葉の話法の重要な要素となる。従ってこれらは直接話法と疑似直接話法の境界上にあると言える。

⑤ Раскольников вошел в свою комнату и стал посреди ее. «*Для чего он воротился сюда?*» (Там же. 326).

⑥ Да, он почувствовал еще раз, что, может быть, действительно возненавидит Соню, и именно теперь, когда сделал ее несчастнее. «*Зачем ходил он к ней просить ее слез? Зачем ему так необходимо заедать ее жизнь? О, подлость!*» (Там же. 326).

ロシア語の疑似直接話法では原則として相対的な時制が用いられるため、疑似直接話法と直接話法の境界が不明瞭になる例も多い。

⑦ Он разъяснил Нехлюдову, что они все высланы и заключены в тюрьму за то, что у них не было паспортов. Паспорта же у них были, но только просрочены недели на две. Всякий год бывали так просрочены паспорта, и ничего не взыскивали, а нынче взяли да вот второй месяц здесь держат, как преступников («Воскресение». Толстой: 13, 186-87).

最初の文は通常の間接話法である。次の下線部は、話し手を含む人々が三人称複数形で指し示されているので疑似直接話法と考えられる。それに続く斜体字部分は先行する文との関係から疑似直接話法と解釈されるだろうが、話し手や聞き手を指す代名詞が存在しないので、結果的に直接話法で伝達されるものと同じになってしまうのである。

話法のどの位置に存在するか解釈により変わるものもある。

⑧ Лиза собралась с духом и объявил ему, что не может быть его женой. Он выслушал ее до конца, стоя к ней боком и надвинув на лоб шляпу; вежливо, но измененным голосом спросил ее: *последнее ли это ее слово и не подал ли он чем-нибудь повода к подобной перемене в ее мыслях?* («Дворянское гнездо». Тургенев: 7, 251).

原発言が《ли》を用いており、《последнее ли..., не подал ли...?》であったとすれば、これは直接話法に近い疑似直接話法ということになる。一方原発言は《ли》を用いていなかったと考えるならば、これは間接疑問文に近い。つまり間接話法に近い疑似直接話法となる。

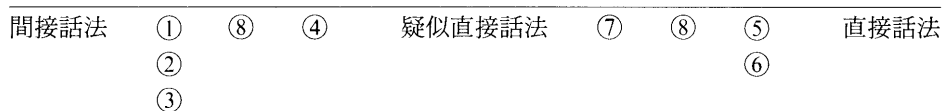
ここに引用した例と直接話法、疑似直接話法、間接話法との関係を図示すれば〈図1〉のようになる。

文学作品には、複数の話法の特徴を併せ持つ表現が多く観察される。言葉を伝える形式、すなわち話法は明確な境界で区切られているのではなく、多くの表現がその境界上に存在するのである。

4. 結論

ロシア語には非文法的な半直接話法は別にして、直接話法、間接話法、疑似直接話法という三つの話法が認められている。しかし疑似直接話法に関しては、そ

図 1



れが「伝達された言葉」であることが確認されてはじめて成り立つという意味で、他の二つの話法とは質的に異なる。また疑似直接話法は、直接話法と間接話法の間に位置してはいるが、その境界は曖昧であり、直接話法と疑似直接話法、あるいは間接話法と疑似直接話法の特徴を併せ持つ表現も頻繁に用いられている。つまり話法はなだらかなグラデーションを成している」と筆者は考える。直接話法、間接話法、疑似直接話法の三つはそのグラデーションにおける典型的、あるいは規範的なものののだ。そしてこれら規範的な話法だけでなく、その境界上にある表現も文学作品では広く用いられており、それらは様々な効果を生み出し、作品をより一層表情豊かなものにしてしているのである。⁸

(あらい みちよ・同志社大学)

文献

- Barnetova, V. et al. *Русская грамматика*. 2 vols. Praha: Academia, 1979.
- Leech, G. N., and M. H. Short. *Style in Fiction*. London: Longman, 1981.
- McHale, B. "Free Indirect Discourse: A Survey of Recent Accounts." *A Journal for Descriptive Poetics and Theory of Literature* 3 (1978).
- Sternberg, M. "How Indirect Discourse Means: Syntax, Semantics, Poetics, Pragmatics." *Literary Pragmatics*. Ed. R. D. Sell. London: Routledge, 1991.
- Волошинов, В. Н. *Марксизм и философия языка*. The Hague: Mouton, 1972. 邦訳：ミハイル・バフチン『言語と文化の記号論』北岡誠司訳，新時代社，1980；ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学』桑野隆訳，未来社，1989.
- Достоевский, Ф. М. *Полн. собр. соч.: в 30-ти томах*. Л.: Наука, 1972-90.
- Ковтунова, И. И. "Несобственно-прямая речь в современном русском литературном языке." *Русский язык в школе*. № 2, 1953.
- Коженикова, Н. А. *Типы повествования в русской литературе XIX-XX вв.* М.: Институт русского языка РАН, 1994.
- Крючков, С. Е., и Л. Ю. Максимов. *Современный русский язык*. М.: Просвещение, 1977.
- Падучева, Е. В. *Семантические исследования. Семантика времени и вида в русском языке, семантика нарратива*. М.: Школа «Языки русской культуры», 1996.
- Русский язык. Энциклопедия*. Гл. ред. Ю. Н. Караулов. М.: Большая российская энциклопедия, 1997.
- Толстой, Л. Н. *Собр. соч.: в 22-х томах*. М.: Художественная литература, 1978-85.
- Тургенев, И. С. *Полн. собр. соч. и писем: в 28-ми томах. Соч.: в 15-ти томах*. М.;Л.: Изд-во АН СССР, 1960-

68.

- Успенский, Б. А. *Поэтика композиции*. М.: Искусство, 1970. 邦訳：ボリス・ウスペンスキイ『構成の詩学』川崎 渉・大石雅彦訳，法政大学出版局，1986.
- 新井美智代「意識に響く言葉」、『*Славяна*』10 (1995)：129-39.

注

- ¹ ロシア語の疑似直接話法に相当するものについては、当該の言語や研究者によって、描出話法 (represented speech), 体験話法 (erlebte Rede), 自由間接体 (style indirect libre) など様々な名称が使われているが、ここではロシア語に関しては疑似直接話法、英語に関しては自由間接話法という用語を用いる。なお E. パードゥッチェヴァは疑似直接話法と自由間接ディスコース (свободный косвенный дискурс) とを区別し、後者を伝統的な所謂三人称や一人称の叙述と対置させ、語り手が姿を表さず、疑似直接話法をその特徴的なものとする叙述のスタイルを意味するものとしている。
- ² Б. Успенский はこの半直接話法に「疑似直接話法」という名称を与え、疑似直接話法は、登場人物の思考を作者が加工した「内言 внутренняя речь」あるいは「内的独白 внутренний монолог」としてとらえている (Успенский 59)。一方《Русская грамматика》にはこの意味での半直接話法への言及はない。恐らくこの話法が一般的には誤りとされているためと思われる。
- ³ 疑似直接話法は一人称の語り手による作品にもしばしば独白の形で用いられ、その場合は《Мне холодно.》となるが、本論では通常の直接話法と区別するため、いわゆる「三人称の語り手」による典型的な疑似直接話法の例を示した。
- ⁴ ただしスタンバーグがこの定義を提示したのは、その不十分さを後に証明するするためだった。
- ⁵ これは間接話法が必然的にその主節によって、また直接話法が導入文や引用符によって、伝達される言葉であることが明示されるのに対し、疑似直接話法はそれが示されないことが多く、さらに人称代名詞や動詞の人称形が語り手の視点から決定されることに起因する。その結果語り手の言葉との区別が曖昧になることがこの話法の面白さでもある。ちなみに導入文や引用符を用いずに人称と時制は想定される原発言のものを保ちながら叙述部分に埋め込まれる直接話法 (クリュチコフとマクシモフの用語では《непосредственное включение》、英語では一般に《free direct speech》) も語り手の声との境界が曖昧になるため、疑似直接話法と似通った効果をもたらすことは興味深い。
- ⁶ なおこれらの指標は全てを網羅しているわけではなく、また絶対的でもないことを、コフトゥノワ自身が強調している (Ковтунова 27)。
- ⁷ Ю. Казаров の中編『青と緑』の叙述は一人称の語り手によって現在形で進められていくが、随所で疑似直接話法が効果的に使われている。詳細は拙論を参照 (新井 129-39)。

新井美智代

* 疑似直接話法（自由間接話法）のもたらす効果として一般に「アイロニー」と「共感」が挙げられる。これは発言を表現する場合と思考の場合とでは傾向が異なるよう

に思われるが、いずれにせよ作品の内容あるいは文脈如何による。この問題は極めて興味深いものだが、紙幅の都合上、稿を改めて考察したい。

Митиё АРАИ

Пограничные случаи передачи чужой речи

(о несобственно-прямой речи)

Считается, что так называемая «несобственно-прямая речь» (по-английски «free indirect speech» или «represented speech», по-французски «style indirect libre») занимает промежуточное положение между прямой и косвенной речью. Но формальные особенности несобственно-прямой речи состоят в том, что в ней нет синтаксического подчинения, как в прямой речи, а по категории лица наблюдается подчинение лицу рассказчика, как в косвенной речи. Значит, они относятся и к повествованию рассказчика. Поэтому высказывание можно считать несобственно-прямой речью только в том случае, если по его содержанию подтверждается то, что оно есть не прямая речь рассказчика, а переданное им высказывание. Следовательно, несобственно-прямую речь следует отличать от прямой и косвенной речи, которую можно в принципе определить по формальным и грамматическим признакам. Иначе говоря, высказывание, оформленное, как несобственно-прямая речь, находится в промежуточном положении между прямой и косвенной речью при условии, что оно занимает место между речью действующего лица и речью рассказчика.

Таким образом, помимо традиционно выделяемых способов передачи чужой речи — прямой речи, несобственно-прямой речи и косвенной речи — существуют также смешанные типы, примеры которых приводит в своей работе Н. А. Кожевникова.

Обращаясь к работам В. И. Волошинова, следует отметить, что, несмотря на критику попытки А. М. Пешковского превратить прямую речь в косвенную, он, без всякого сомнения, признает размытость границ между типами передачи чужой речи. Волошинов утверждает, что косвенная речь в русском языке, тем не менее, имеет аналитический характер.

Как показывают примеры из литературных произведений, разные типы передачи чужой речи демонстрируют постепенный переход от одной стадии к другой, т. е. формируют постепенную градацию (переход).